

「吉田清治」長男、衝撃の告白

慰安婦像をクマラ車で撤去した 慰安婦問題を作った男の肖像

生年も出身地も定かでなく、学歴も経歴も不明。そして名前はいくつもあった——。謎に包まれてきた「吉田清治」の正体を長男が語った。

おおたかみき
大高未貴

ジャーナリスト

1969年生まれ。フェリス女学院大卒業。100か国以上を放浪、ダライ・ラマ14世、アラファト議長などにインタビューした。著書に「ISIS イスラム国極端支配の真実」。



写真 読売新聞/アフロ(左)、時事通信社

止まらない日本バッシング

平成二六年八月五日、朝日新聞は朝刊一面で「慰安婦問題の本質 直視を」と自社の立場を説明する記事を掲載したうえで、一六、一七面の見開き全面を使っ

て「慰安婦問題 どう伝えたいか 読者の疑問に答えます」と題する同問題の検証記事を掲載した。八〇年代から同紙が執拗に報道してきた慰安婦問題の記事について、各界から疑問や批判が高まったため、やむなく対処した格好だった。

ここで同紙は、初めて「慰安婦狩り」をしたと話してきた吉田清治氏の証言を「虚偽」と判断、一六本の記事を撤回した。だが、二日続いた検証記事では謝罪の言葉がなく、そこにも批判が集中したため、九月一日、ついに木村伊量社長

や杉浦信之取締役らが会員を開き、謝罪するに至ったのだった。

あれから二年。

国内では、教科書から慰安婦問題の記述が消え、ある程度決着がついたように見える。だが、海外では解決どころか更なる悪化を見せている。慰安婦問題を「最終的かつ不可逆的に解決する」とうたった昨年末の日韓合意締結後にも、アメリカやオーストラリアで、在米・在豪韓国人、中国系活動家らによる反日ロビ活動に拍車がかかり、新しい慰安婦像設置の動きも加速している。また史実にそぐわない慰安婦問題の記述が米国カリフォルニア州の高校教科書に掲載されることが、今年七月、教育委員会の潰瘍一致で決定された。これが他州に及ぶ可能性もある。

何より問題なのは、「吉田証言」を根拠とするクマラスワミ報告が撤回されなかったことだ。

クマラスワミ報告は平成八年、国連人権委員会の決議に基づいて提出された日本への非難勧告書だ。そこでは、第二次

世界大戦終了時に行われた米軍の「慰安婦」等への聞き取り調査とともに、吉田証言が重要な証拠として出てくる。

中にはこうある。

「強制連行を行った一人である吉田清治は戦時中の体験を書いた中で、国家総動員法の一部である国民労働報国会の下で、他の朝鮮人とともに1000人もの女性を『慰安婦』として連行した奴隷狩りに加わっていたことを告白している」

平成二六年、外務省の佐藤地人権人権担当大使は、作成したラダイカ・クマラスワミ女史と面会し、朝日新聞の吉田証言による記事は虚偽であったとする訂正報道に従い、吉田証言の引用部分の撤回を申し入れた。だが彼女は「吉田証言は証拠の一つに過ぎない」とし、いまだそれに心していない。

また、韓国政府も平成四年に「日帝下軍隊慰安婦実態調査中間報告書」を作成して吉田証言を採用しているが、それを取り消したという話は聞かない。

朝日新聞が吉田証言の記事を撤回しようとも、国際的には事態がまったく改善

されていないのだ。「(慰安婦は)残虐性と規模において前例のない二〇世紀最大規模の人身売買のひとつである」というアメリカ合衆国下院二二二号決議は、いまでも生きている。

慰安婦問題最大の焦点は「日本軍が慰安婦を強制連行」したかどうかである。だが日韓両政府が血眼になって記録を調べても、それを証明する公文書資料は見つかっていない。だから山口県労務報国会下関支部の動員部長だった吉田清治氏の「軍の命令で朝鮮人女性を強制連行し慰安婦にした」という証言が重要だったわけだ。だがそれが虚偽であることは、朝日新聞の撤回を待たずともはつきりしていた。当の清治氏自身が、週刊新潮の取材にこう答えているのだ。

「まあ、本に真実を書いても何の利益もない。関係者に迷惑をかけてはまずいから、カムフラージュした部分もあるんですよ。事実を隠し、自分の主張を混ぜて書くなっているのは、新聞だってやっているとじやありませんか。チゲハグな部分があってもしょうがない」(平成八年

五月二・九日号)

また自ら済州島の調査を行い、すでに平成四年に産経新聞で証言の信用性について疑義を投げかけた現代史家の秦郁彦氏もこんなエピソードを書いている。

電話で清治氏と話した秦氏が、「『善書は小説だった』という声明を出したらどうか」と勧めたところ、「人権屋に利用された私が悪かった」「私にもプライドはあるし、八十五歳にもなって今さら……このままにしておきましょう」と話したという。

吉田清治氏は意識的に歴史を捏造した。それは明らかである。ではなぜ、何のためにそうしたのか。虚偽の証言を続けてきた動機は何なのか。それらはいぜん謎のままである。いやそれどころか、実は清治氏がどんな人間であるか、どんな経歴であるか——どこで生まれ育ち、何をしてきたのか、その学歴も職歴も実はよくわかっていないのだ。

いったい吉田清治とは何者なのか。

今回、私は吉田清治氏の長男のロングインタビューに成功した。そこからわか

ってきたのは、思いもよらない新事実だった。

謎の生い立ち

長男は関東北部の県で質素な一人暮らしをしていた。現在六六歳。翻訳で生計を立てているという。小柄で温厚、とてもまじめそうな風貌だった。

「父が犯した慰安婦強制連行の捏造について、吉田家の長男として、日本の皆様のためにへん申し訳なく思っております。できることなら、世界中の慰安婦像をクレーン車で撤去したい。父の過ちを糾したい、少しでも罪滅ぼしをしたい、そういう気持ちから、私の知りうることをすべてお話します。私自身、なぜ父があんなことをしたのか知りたいのです」

と、吉田清治氏の長男は語り始めた。清治氏は平成二年七月二〇日に死去するが、それまでずっと一緒に暮らしてきたのが、この長男だった。

清治氏は、その生年からしてはつきりしていなかった。出生地も諸説あった。さらに言えば、門司市立商業高校に通

たが、その卒業名簿(平成一〇年発行)では第二回卒業生の物故者のほうに入っている。

今回、長男から見せてもらった資料から、清治氏は、大正二年一〇月一五日生まれとわかった。出生地は、福岡県鞍手郡宮田町大字長井鶴。本籍は福岡県筑前郡吾妻町大字吾屋である。

本人は本籍などを山口県としていたが、お隣の福岡県で生まれ育ったわけである。そして本名は、吉田雄亮という。これはすでに判明していた事実だが、長男によれば、

「本来でしたら雄治という名前になるはずだったのですが、役場が書き間違えて治を亮としてしまった。父は、本名が好きではないと言っていました。それでペンネームをつけて清治としていたのですよ」

とのことだ。

父は吾吾、母はタメ。長男だが、姉が三人いたという。

清治氏は、大正八年、わずか五歳で吉田家の家督を相続している。祖父の藤次

郎が亡くなったあと、父を飛ばして雄亮が戸主となっているのだ。

その経緯は不明だが、祖父・藤太郎は瀨賀郡にあった三菱石炭鉱業の貯炭場の主任をしており、当時は羽振りが良かった。芦屋の役場の向かいに土地を買って家を建てたのは、この藤太郎だったという。急死した原因は、当時大流行したスペイン風邪。地元は福岡県立門司商業高校(門司市立商業高校の後身)の記念誌にも、大正七年から八年にかけて北九州で大流行とある。

幼くして祖父から直接家督を相続した清治氏だが、この他にも吉田家には不可解な記録がいくつもあつた。清治氏の従兄従弟として他家から二名が入籍しているほか、清治氏と四歳しか違わない朝鮮人が清治氏の養子となっているのだ。これは後に詳しく記す。

吉田氏は門司市立商業高校に学び、昭和六年に卒業。そして、「東京の大学をでる」と、自著『朝鮮人慰安婦と日本人』(新人物往来社)には記している。どうやらこれは法政大学らしいが、進ん

だ学部、卒業したか中退したかは定かでない。法政大の名簿にその名前はない。

その後は何をしていたのか。

前掲書では、昭和二年に満州国国務院地籍整理局、昭和四年から一年余り陸軍航空輸送隊の嘱託、一五年に中華航空上海支店に勤務していたという。同年六月に金丸(朝鮮独立運動家)を輸送したかどで逮捕され、懲役二年の判決を受け、昭和一七年に諫早刑務所から出所したことになる。そして同年、問題の山口県労働報国会下関支部の動員部長に就任したというのだ。

これには以前から疑義が差し挟まれてきた。歴史学者・上杉十年氏の調査では、中華航空社員会で清治氏を記憶する人はなかったし、逮捕についても先の秦郁彦氏の追及に「アヘン密輸に絡む軍事物資横領罪」と答えたことがある。また逮捕された人物が出所後すぐ、半官半民の半ば公職に就くおかしさも指摘されている。

長男が言う。

「父は胸のレントゲン撮ると白い影が写ったんだそうです。結核と間違われる

けれども、結核ではない病気なんだそうです。それで軍の徴用を免除され、重傷みたいな形でいろいろな仕事をしました」

そして、

「上海の航空隊とか、満州で地籍整理をやっていたのは聞いています。満州では、一年間現地の学校で勉強して中国語がしゃべれるようになった。それで部下の朝鮮人二人、中国人を五人から一〇人くらい、馬車や馬、ラバに乗せて調査に行った。そこでは航空写真をもとに中国人が測量し、彼らを朝鮮人に管理させていたということなんです」

清治氏はこの満州で李禎郁という人物を養子にしている。昭和二年四月のことだ。清治氏と四つ違いだから一九歳の若者である。禎郁氏はその五年後、満州で日本人と結婚する。

清治氏は前掲の自著で、東京生まれの金永彦なる人物を昭和二年に養子とし、同年小学校教師の日本人と結婚、直後に小倉連隊に入り、昭和三年九月、中国の間島省で戦死したと書いている。

もともとあった事実を歪めて話を作っているわけだ。

「若い頃、正義感に燃えて拳手にしてやっとなんて父は言っていましたか、どこまでがほんとのことなのか。私は会ったことがありません。ただ養子にしたことで、親戚から戸籍を汚したと、非難されたようです。また職場からもよく言われず、それが刑務所に投獄される理由になったと言っていた。ただ詳しくはわからないのです」

この養子を巡って何があったのか。

戦前に榎郁氏には二人の子供が生まれた。長男は昭和八年に福岡で出生、次男は昭和二〇年八月に中国・遼寧市で生まれている(翌年瀋陽で死去。だから日本と大陸を行き来していたことがうかがえる。戦後は日本に来て、吉田家の籍からは昭和三年に抜けているが、その後も清治氏の人生に影を落とすとしていく。

吉田清治の戦後

「慰安婦狩り」をしたという山口県労務報国会下関支部について、長男はほとんど

ど何も聞いていない。ただし、これだけは訴えたいところ述べる。

「労務報国会の下関支部は朝鮮人男子の労務というか、下関市内の大工、左官、土木工事の方々を雇って日当で払う仕事の現場監督みたいなものですから、従軍慰安婦とは何の関係もない。そのことは長男としてはつきり言っておきたい」

労務報国会は日雇い労働者の組織化を図るため昭和十七年六月に設置された半官半民の組織である。吉田清治氏が在籍していた確かな証拠はないが、否定する材料も見つかっていない。ただ長男はこんなことを言う。

「終戦時、父は労務報国会で物資の管理をしていたそうです。だから戦後、その物資を自由に隠匿できた。戦後一番必要になるものは何かと考えると、食料です。それを作るためにお百姓さんには肥料が必要ですから、そこにあつた配給の余りものの肥料を隠匿して『下関肥料』という会社を作った。一時はもうかつたようです。ただ父は商売の経験がない。どんぶり勘定であつたと言つた間に倒産してしま

いました」

調べてみると、昭和五年九月一八日付で「下関肥料株式会社」という会社が登記されていた。取締役二名に続き、「会社を代表する取締役」として吉田雄鬼の名前がある。昭和二六年に取締役一人が辞任し、清治氏の妻フサエさんに替わっているから、この頃までは活動していたのかもしれない。

同時期、清治氏は下関市議会議員選挙に共産党から立候補して落選している。昭和二年のことだ。これに関しては、「雇っていた朝鮮人がみんな共産党で、それで立候補したんじゃないかな。担がれて、その後は共産党とのかかわりなんて一回もないです」

と長男はそつけない。

時代を少し遡るが、清治氏が結婚したのは、昭和一九年五月のことである。下関市に婚姻届を出している。妻フサエさんの実家は、農業のかたわら、煙草と塩の専売店を営んでいたという。戦後の混乱期は実家かその付近に住んでいたよう

そして今回のインタビューをした長男が生まれるのは、昭和四年。二年後には次男が、その翌年には三男が誕生するものの、三男は生後一週間ほどで世界してしまふ。

長男の記憶するところでは、清治氏は生涯、仕事らしい仕事に就いたことがないという。

「小学校のとき、経済的な理由で何回も引越しました。だからよく転校した。食しがつたと思います。ただ父は非常に気位が高く、働かずに家にいても男子厨房に入るべからずという感じで、女子供のやるようなことは絶対しない。母の実家にいたときだけ食事には困らなかつたという記憶があります」

記録では、昭和三〇年から三五年まで、一家は東京・三鷹に住んでいたことになっている。

「借金取りに追われて、逃げるようにして三鷹へ行ったんじゃないでしょうか。四人掛けの席の真ん中に板をかけて親子四人、ゆつたり足を伸ばして座れるようにしたのを覚えています」

長男の生年を考えると、三鷹には入学した小学校があつた可能性がある。長男は下関市の小学校二校にも通つた記憶があるから、中学までには下関に民つている。その東京での時間が何だったのか、長男にはわからない。

民つて間もなくの頃だったか、清治氏はNHKが募集していた「ラジオと私」

という懸賞に応募して、一等、一〇万円を獲得したという。当時の大金である。

「私が小学六年か中学一年頃かと思いますが、いい作文でした」

と長男は振り返る。

父(清治氏)が煙草すると、ラジオから流れてくるはやりのコマースタルンクに合わせ、母子二人が楽しそうに踊っていた。普段、父は子供に歌謡曲を聞かせないようにしていたから、母がラジオを消そうとすると、父はその楽しそうな様子に「そのまま、消さないでよい」と母に告げた――。

そんな話だったという。

「テレビが買えない貧しい家庭を象徴するものがラジオでした。父は教育に関し

ケトル

最高に無駄が詰まった
ワンデーママガジン

<http://www.ohtabooks.com/qjkettle/>

毎偶数月15日発売 900円+税 木田出版

好評発売中